第八章　紫の上の物語　紫の上の境遇と絶望感

［第一段　明石姫君、懐妊して退出］

*桐壺の御方は(ところで東宮妃でいらっしゃる桐壺にお住まいの明石女御は)、*うちはへえまかでたまはず(昨年の四月に入内して以来、ずっと里下がり出来為さいませんでした)。　*「桐壺の御方」は注に＜明石女御。源氏の母、桐壺更衣と同じ殿舎を局とした。ただし、東宮は淑景舎（桐壺）の隣の梨壷にいたので、最も近い殿舎である。＞とある。明石姫が桐壺に部屋を構えていることは、梅枝巻二章二段に「この御方は(こちらの源氏姫の御部屋は)、昔の御宿直所(昔の殿の御宿直部屋の)、淑景舎を改めしつらひて(淑景舎を改装なさって)、御参り延びぬるを(参内が延期となってしまったのを)、宮にも心もとながらせたまへば(春宮におかれても待ち遠しく御思いあそばすので)、四月にと定めさせたまふ(四月の参内とお決めなさいます)」と説明されてはいたが、此処で行き成りの「桐壺の御方は」の書き出しは唐突だ。現代語の文の書き方としては、「ところで東宮妃であらせられる」くらいの枕が話題転換には必要だ。　*「うちはへ」は「打ち延へ」と表記され＜打ち続いて、そのままずっと、長い間＞と古語辞典に説明がある。注には＜昨年の夏四月に入内。以来、ずっと里下がりできないでいた。＞と、文意解説がある。従って補語する。

御暇のありがたければ(御休暇は東宮の御許しが出なさそうなので)、心安くならひたまへる若き御心に(六条院で気軽に暮らしていらした幼い妃には)、いと*苦しくのみ思したり(実家に帰れないのがとても辛くて仕方が無いとお思いになります)。　*「苦しくのみ」の副助詞「のみ」は、「苦し」という状態を示す形容詞に付いているので、名詞や動詞に付いて上の事物を＜～だけ、～ばかり＞と限定する意味ではなく、その状態の程度を＜～で堪らない、～で仕方がない＞と強調する。

*夏ごろ(夏になると)、悩ましくしたまふを(桐壺皇太子妃は気分が優れずいらしたが)、*とみにも許しきこえたまはねば(皇太子はお気に入りの妃の里帰りを容易にはお許し下されないので)、いとわりなしと思す(妃は困ったこととお思いになります)。　*「夏ごろ」という言い方は、「ごろ」が＜およその期間を指す接尾語＞で曖昧表現だから、「悩まし」は＜懐妊の兆候＞と注にあるが、その時点では懐妊がはっきりしなかった、という言い方なのだろう。夏は四月五月六月で、この桐壺妃の話題はその期間全体に渡る話というようにも聞こえるが、春の話題が終わった後だから、差し当たっては初夏の頃で、後から思えば悪阻の吐き気だったであろうものが、暫くは単に体調不良と見做されていた、という事情説明なのだろう。ただ、14 歳の皇太子と 12 歳の妃との間の受胎は想定されていない、などと言う事は有り得ない。今でも、日本でもそうした若年出産はあるが、問題はその育児体勢であり、婚姻は元々がヒトの生理がそのように設計されていることを前提にした一つの育児形態なのだから。　*「とみに」は＜直ぐに、簡単に＞だが、それは皇太子が桐壺妃を気に入って離れたくないから、なのだろうから、そう補語する。

*めづらしきさまの*御心地にぞありける(しかしこの桐壺妃の御不調は、お目出度の御容体だったのです)。　*「めづらしきさまの御心地」は注に＜懐妊のことをいう。＞とある。ということは、「めづらし」は＜お目出度＞という言い方らしい。　*「みここち」の「心地」は＜心持ち＝気持＞ではなく＜様子＝容態＞。係助詞「ぞ」は意外性のある驚きを示し＜是こそ～だった＞という言い方だ。また、論理文脈を示す接続詞は現代語では文意の客観性を担保するための必須語法なので、此処では「しかし」と当然に補語する。

*まだいとあえかなる御ほどに(妃はまだとてもお産が危ぶまれる未熟なご年齢なので)、いとゆゆしくぞ(とても案じられると)、誰れも誰れも*思すらむかし(皇太子も源氏殿もお思いになったようで)、からうしてまかでたまへり(懐妊が確かめられてから皇太子の御許しが下り、桐壺妃はようやく里帰りなさいました)。　*「まだいとあえかなる御ほど」は注に＜明石の女御、数え年十二歳。＞とある。「あえか」は古語辞典に＜動詞「落ゆ(あゆ、零れ落ちる・流れ出る・減衰する)」の連用形に状態を示す形容動詞「か」が付いたものか。「あやふし」とも語源的関係があるか＞との推論が示され、現代語での言い方としては＜きゃしゃなさま。はかないさま。＞などが例示されている。恐らく、「落ゆ」は「肖ゆ(あゆ、似る)」と同語源なのだろう。零れ落ちた一部が元の物の全体を説明するような認識上の補完関係に見える。しかし私には、その他動詞の「あやす」や受身自動詞の「あやかる」や印象形容詞の「あやし」などは今に継がれている気がするが、自動詞の「あゆ」は使用実感が無いので、社会的な認識感が掴めない語だ。また、接尾語扱いの形容動詞「か」に付いては、「ほのか」は嗅覚、「かすか」は視覚、「わずか」は触角だろうか、何れ少ない手掛かりで何某かの確かな存在を認識することを表現する言い方のようだが、「あえか」は何かの存在を前提にその対象体の不確かな要素として、脆くて危うい状態を示す語のようだ。此処で「危ぶまれる」のは、やはりお産か。明石姫は数えで 12 歳だが、三月生まれなので夏であれば満年齢で 11 歳を過ぎた頃。そうした実情を踏まえれば、この「あえか」は＜お産が危ぶまれる未熟さ＞で、「おおんほど」が＜御年齢＞なのだろう。ただ、ヒトの野生を考えれば、生命力の強い者しか生き残れないので、妊娠可能年齢に達したばかりの若い個体にこそ活力が期待できるから、若年産は熟年産より危ういどころかむしろ安全だ。だから、此処の「ゆゆし」は失敗を恐れる貴族人の現代人にも似た社会心理に違いない。此処の文意は「あえか」と「ゆゆし」の語自体の不確かさと相俟って、視点が今の看護体制の認識に近いところが却って分かり難い。　*「思すらむかし」は敬語表現なので、「誰れも誰れも」は＜東宮や源氏などをさす。＞と注にある。つまり、この文は皇太子の視野を以てした女房語り、なのだろう。

姫宮のおはします(姫宮が西側にいらっしゃる)御殿の東面に(おとどのひんがしおもてに、寝殿の東側に)、御方はしつらひたり(桐壺妃の御部屋は設けられました)。明石の御方(実母の明石御方様は)、今は御身に添ひて(今は妃に付き添って)、出で入りたまふも(参内し退出なさいますのも)、あらまほしき御宿世なりかし(念願叶った御運勢なのでしょう)。

[第二段　紫の上、女三の宮に挨拶を申し出る]

対の上、こなたに渡りて対面したまふついでに(対の上が寝殿に来て妃と対面なさるこの機会に)、

「姫宮にも、*中の戸開けて聞こえむ(姫宮にも中の戸を開けてご挨拶申し上げましょう)。かねてよりもさやうに思ひしかど(前々からそのように思っていましたが)、ついでなきにはつつましきを(機会がなく事改まってでは気詰まりで)、かかる折に聞こえ馴れなば(こうした折にお近付き申せば)、心安くなむあるべき(格式張らずに済みましょう)」　*「中の戸」は寝殿を東西に仕切る襖障子。「野分」巻には「内の御障子」とあった。と注にある。

と、大殿に聞こえたまへば(源氏殿に申しなさると)、うち笑みて(殿は微笑んで)、

「思ふやうなるべき御語らひにこそはあなれ(それは私も考えていた御話し合いなんですよ)。いと幼げにものしたまふめるを(姫宮はとても幼い様子でいらっしゃるので)、うしろやすく教へなしたまへかし(困らないように色々と教えてあげて貰いたい)」

と、許しきこえたまふ(御対面をお許し申しなさいます)。

宮よりも(上は宮に対してよりも)、明石の君の恥づかしげにて交じらむを思せば(明石御方に引けを取らないように御会いしたいとお思いになって)、御髪*すましひきつくろひておはする(御髪を洗い手入れしていらっしゃるのが)、たぐひあらじと見えたまへり(比類ない美しさに見えなさいます)。　*「すます」は「澄ます、清ます」で＜洗う＞。

大殿は、宮の御方に渡りたまひて(源氏殿は姫宮の御部屋に出向きなさって)、

「夕方、かの対にはべる人の、*淑景舎に対面せむとて出で立つ(夕方にあの対におります者が桐壺妃に会いにこちらへ出て来ます)。そのついでに(その折に)、近づききこえさせまほしげにものすめるを(あなたにも御近付きのご挨拶を申したいと言っておりますので)、許して語らひたまへ(心得て話し合って下さい)。心などはいとよき人なり(安心できる人です)。*まだ若々しくて、御遊びがたきにも*つきなからずなむ(まだ若々しくしているので、あなたの遊び相手にもなることでしょう)」　*「しげいしゃ」と殿は愛娘の桐壺女御を指呼する。　*「まだ若々し」と殿は上を形容する。姫宮 14 歳、殿 40 歳、上 32 歳。宮から見て、殿は二回り上で、上も一回り以上年上だ。普通は親子の年回り。実際に明石姫の桐壺妃とは親子だ。その上、宮はその懐妊した 12 歳の桐壺女御と比べても仕込み不足で子供っぽい。奇妙な配役場面だ。因みに、私見では明石御方は 35 歳。　*「つきなし」は「付き無し」というク活用カリ系語尾変化の形容詞で＜不都合だ、似合わない＞と古語辞典にある。

など、聞こえたまふ(などと申しなさいます)。

「恥づかしうこそはあらめ(気が引けます)。何ごとをか聞こえむ(何をお話ししたものか)」

と(と宮は)、おいらかにのたまふ(素直に仰います)。

「人のいらへは(お返事は)、ことにしたがひてこそは思し出でめ(お話しに応じて考えなされませ)。隔て置きてなもてなしたまひそ(構えず気楽にお話しなさい)」

と(と殿は宮に)、こまかに教へきこえたまふ(丁寧に教え聞かせ申しなさいます)。「御仲うるはしくて過ぐしたまへ(上と宮がどうか仲良く暮らしなさいますように)」と思す(とお思いになります)。

あまりに何心もなき御ありさまを見あらはされむも(宮のあまりにも無邪気な御様子を上に分からせてしまうのも)、恥づかしくあぢきなけれど(殿は極まり悪く立場がなかったが)、さのたまはむを(折角の上のお申し出を)、「心隔てむもあいなし(止め立てするのも良いことはない)」と、思すなりけり(お思いになったのです)。

［第三段　紫の上の手習い歌］

対には（対の上に於かれては）、かく出で立ちなどしたまふものから（このように寝殿にお出向きなさることにしたのだが）、

「我より上の人やはあるべき（私より上位の人がこの六条院に居て良い筈はない）。身のほどなるものはかなきさまを（こちらから挨拶に出向くなど、自分の身分が劣ることを）、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめ（姫宮に認め申し上げるばかりではないか）」

など、思ひ続けられて（思い続けずには居られずに）、うち眺めたまふ（暗い気分になりなさいます）。手習などするにも（気晴らしに習字などをするにつけても）、おのづから古言も（その思いつく古歌の文句も）、もの思はしき筋にのみ書かるるを（物思いに沈みがちなものばかりを書いてしまうのも）、「さらば、わが身には思ふことありけり（やはり自分には悩みがあるのだ）」と、身ながらぞ思し知らるる（自分で思い知らされます）。

院（源氏殿は）、渡りたまひて（対の自室へお帰りなさって）、宮、女御の君などの御さまどもを（宮と女御の御二人の御姿を）、「うつくしうもおはするかな（かわいらしくいらっしゃる）」と、さまざま見たてまつりたまへる御目うつしには（それぞれ拝し申しなさった後の御目には）、年ごろ目馴れたまへる人の（長年見慣れなさった紫の上が）、おぼろけならむが（並の器量で在ったなら）、いとかくおどろかるべきにもあらぬを（とてもこれほどは目を見張るようなものでは無いだろうに）、「なほ、たぐひなくこそは（未だに比類ない美しさだ）」と見たまふ（と上をお思いになります）。ありがたきことなりかし（絶品なのです）。

あるべき限り（何処を見ても）、気高う恥づかしげにととのひたるに添ひて（上は気高く張り詰めたような美しさであるのに加えて）、はなやかに今めかしく（華やかで新鮮で）、にほひなまめきたる*さまざまの香りも（内面から匂い立つ色々の魅力的な表情も）、取りあつめ（合わせ持って）、めでたき盛りに見えたまふ（愛で称えるべき素晴らしさに見えなさいます）。去年（こぞ）より今年はまさり、昨日より今日はめづらしく（目新しく）、常に目馴れぬさまのしたまへるを（いつも見飽きない様子でいらっしゃるのを）、「いかでかくしもありけむ（どうして是ほどまでにも優れているのだろう）」と思す（と殿はお思いになります）。　*「さまざまの香り」は何か下敷きになる歌でも在るのだろうか。「かをり」は＜顔などのにおいたつような美しさ。＞と大辞泉にあるので、「さまざまの香り」は＜色々の魅力的な表情＞なのだろう。

うちとけたりつる御手習を（思いのままに書いてある習字紙を）、硯の下にさし入れたまへれど（上は硯の下に隠しなさったが）、見つけたまひて（殿は見つけなさって）、引き返し見たまふ（引き出して御覧になります）。手などの（筆跡などは）、いとわざとも上手と見えで（そう凝った書家風ではなく）、らうらうじくうつくしげに書きたまへり（丁寧に美しく書いていらっしゃる）。

「身に近く秋や来ぬらむ、見るままに青葉の山も移ろひにけり」（和歌 34-15）

「ふと知らぬ間に秋が来て、見る間に山は紅葉付く」（意訳 34-15）

*注に＜紫の上の手習い歌、独詠歌。「白露はうつしなりけり水鳥の青葉の山の色づくみれば」（古今六帖二、山、九二一、三原王）「紅葉する秋は来にけり水鳥の青葉の山の色づく見れば」（古今六帖三、水鳥、一四六八）。「秋」に「飽き」を懸ける。わたしは飽られたのでしょうか、の意。＞とある。引歌を Web 検索すると万葉集 8-1543 の「三原王(みはらのおおきみ)の歌一首」と題された「秋の露はうつしなりけり水鳥の青葉の山の色づく見れば」がヒットする。「秋の露」の方が「白露」の元、というか古そうだし、何れ歌筋に変わりはなさそうなので、万葉集の歌の方を参照する。で、いくつかのサイトおよび辞書に依ると、「しらつゆ」も「あきのつゆ」も＜露＞のことで、「露」は＜(たぶん失恋の)涙＞であり＜露草＞のことでもある、らしい。で、「露草」は雑草の青花で、「アオバナ」の汁を紙に染ませて染め物の下絵を書く絵具としたものを「うつし(移し染料)」という、らしい。露草の青色は退色し易く、水洗いでも落ちるから、らしい。Wikipedia には、この色素はアントシアニンでアルカリ性で赤に、酸性で青に発色する、とのこと。「みづとり」は、恐らく元々は＜水取り＝清水を汲む＞事に由来する呪い詞だったのだろうが、此処では「青」を言い出す枕詞になっている、ようだ。というのは、「水鳥の」は大辞泉に枕詞として＜水鳥の一種である「鴨」および同音の「賀茂」にかかる。＞とあり、更に＜鴨の羽が青いところから、「青い」にかかる。＞とも説明されているからだ。つまり、「水鳥の青羽」と「青葉の山」を語呂で掛けたオシャレ気分の歌詠み、らしい。通せば、「秋の露は(秋の失恋の涙の露と言えば、この露草は)うつしなりけり(もともと色変わりする染料だったんだ)水取りの青葉の山の(恋の成就を願って祈りを捧げた青葉山が)色づく見れば(赤く変わったのを見て気付いたよ)」で、悲壮な失恋と言うよりは、苦い失敗くらいの味わいか。軽い味わいの歌筋の割には技巧は相当凝っている、ように見える。

とある所に(と書かれてある所に)、目とどめたまひて(殿は目を止めなさって)、

「水鳥の青羽は色も変はらぬを、萩の下こそけしきことなれ」(和歌 34-16)

「秋が来たとは言うけれど、こちらの山は青いまま」(意訳 34-16)

*注に＜源氏の返歌。「秋萩の下葉色づく今よりやひとりある人の寝ねかてにする」（古今集秋上、二二〇、読人しらず）「白露は上より置くをいかなれば萩の下葉のまづもみづらむ」（拾遺集雑下、五一三、参議伊衡）。「水鳥の青羽」は源氏、「萩」は紫の上を喩える。「下葉」と内心の意を懸ける。引歌の「水鳥の青葉」を踏まえて冒頭に詠み込む。わたしは少しも変わっていないのに、あなたの方こそ変です、の意。＞とある。古今集の参照歌の「寝ねかてに(いねかてに)」は＜眠り難い＞という言い方らしいが、この文法説明は面倒だ。「寝ね」は動詞「寝ぬ(寝る)」の未然形で「かてに」につながる。が、「かてに」が難しい。「かてに」は＜補助動詞「かつ(出来る・堪える)」の未然形「かて」に打消しの助動詞「ず」の連用形「に」が付いた語＞と古語辞典に解説される。ということは、「かてに」は＜出来ないで居ること＞を意味する連用名詞だ。が、是が語感の類似からか「難し(かたし、しにくい・するのが難しい)」という形容詞と＜奈良時代から既に混同され、同時に「に」は状態を示す助詞と意識された＞とも古語辞典に説明があり、実際の語用としては「かてに」は＜し難いで居る＞という意味で使われたようだ。で、「寝ねかてに」は＜眠り難いで居る＞という言い方になる、らしい。で、この参照歌は＜秋が深まる今になっての心変わりは独り寝の寒さが身に沁みる＞という歌筋で、是は秋の深まりと共に寒さの厳しさが増すことに重ねて失恋の痛手の深さを詠んだように思われ、心変わりの驚きが主題と目される当歌の参照として、是を特に指摘する意図が私には分からない。せめて、面倒な文法解釈が何かの足しに成る事を願いたい。拾遺集の藤原伊衡(これひら)の歌は＜空気の水滴は冷えた葉の上に涙の様に付く物なのに、どうしてハギは下葉の方から変色するのだろう＞という歌筋で、こちらは意外な心変わりへの恨み節に思われ、参照指摘に適う気がする。

など書き添へつつすさびたまふ(などと書き加えつつ興じなさいます)。ことに触れて(何かにつけて)、心苦しき御けしきの(思い悩みがちな上の御様子が)、下にはおのづから漏りつつ見ゆるを(内心に在るのは自然に見て取れたが)、ことなく消ちたまへるも(表向きは何事も無いように隠していらっしゃるのも)、ありがたくあはれに思さる(殿は尊いと感じ入りなさいます)。

今宵は(この日の夜は女同士の語らいがあるので)、いづ方にも御暇ありぬべければ(上にも宮にも共寝要らずだったので)、かの忍び所に(かの忍び所の尚侍君の二条邸に)、*いとわりなくて(どうにも気になって)、出でたまひにけり(お出掛けなさったのです)。「いとあるまじきこと(本当に不都合な関係だ)」と、いみじく思し返すにも(深く反省するも)、かなはざりけり(止むに止まれなかったのです)。　*「いとわりなくて」は＜どうにもならずに＞だろうか。私は是を一読して、上に「ありがたくあはれに思さる」とあったばかりなのに、所詮は殿には上の苦悩は思い至らずに、だらしなく忍び通いする与太話かと笑ってしまった。いや、作者も此処は読者を笑わそうとしているのは確かだ。ただ、この話の現実味を考えると、六条院の女たちは皆華やかで、少なくとも殿は皆が充実していると思いたいし、そう思うことが殿の自尊心を満足させる。と、二条邸で寂しげな尚侍君が気になる。彼女を慰めてやることが、今の自分に課された役目のように思えてくる。それを果たせば優越感は絶頂になる。全く身勝手な理屈ながら、殿にはそうした使命感が在ったのかも知れない。与太は与太として、救われない人の性だと引いて笑い飛ばすのも一興だが、そこに確かな幸福感がある、と前倒りで味わうのも一興だ。

［第四段　紫の上、女三の宮と対面］

*春宮の御方は(桐壺妃は)、実の母君よりも、この御方をば*睦ましきものに頼みきこえたまへり(実の母君よりもこの紫の上の方を親しく思って頼っていらっしゃいました)。いとうつくしげにおとなびまさりたまへるを(とても立派に大人びて成長なさった妃を)、思ひ隔てず(上は親身になって)、かなしと見たてまつりたまふ(可愛いと思い申し上げなさいます)。　*「春宮の御方」と此処の語りでは明石姫を指名する。是を＜春宮に入内なさった明石姫＞とか＜春宮の子を宿しなさった明石姫＞とでも言ってしまおうか、とも思ったが文意に自身が持てないので控える。それにしても、この人に対しては随分と色々な呼び名を使うものだ。先ず、この章頭の語りに「桐壺の御方」とあり、次に殿が宮に向かってこの人を「淑景舎」と指呼し、更に殿と対面した際の殿からの娘を見る目線だろうか「女御の君」ともあり、そして今は紫の上の目線だろうか「春宮の御方」とある。場面によって呼び方が違ってくるのは誰に対してもあることなのだろうが、この人の場合、この短い語りの中で変わり過ぎる。が、是は妃がそういう複雑な人間関係の中に居る、という事なのかも知れない。そして是までの所、中でも最も客観的な呼び方は「桐壺の御方」のように思えるので、私は主に＜桐壺妃＞と指名したい。　*「むつまし」に付いては、明石姫が実母と別れたのが 3 歳の十二月で満 3 歳に近いが、それから八年間に渡って昨年の四月の入内まで紫の上が母として可愛がり教育してきたことを思うと、もう取り返しがつかない。加えて、「頼みきこゆ」に付いては、今でも表向きの母は紫上であり、明石御方自身もそうだろうが、他の女房郎党も紫上を女主人として決裁を求めるわけだから、実質でも頼らざるを得ないし、その事情が妃の思いになるのは自然だし避けられない。明石御方の失ったものは大きい。が、どんな犠牲を払っても、皇太子妃は成ろうとして成れる地位では無い。是は明石御方が明石一族の悲願を我がものとして、覚悟の上に選んだ生き方だ。しかも今や一緒に暮らせるのだ。悔いは無い、と思いたい。

御物語など(体調や近況などの御事情などを)、いとなつかしく聞こえ交はしたまひて(とても打ち解けて妃と話し交わしなさってから)、中の戸開けて(上は寝殿の東西を仕切る襖戸を開けて)、宮にも対面したまへり(降嫁なさった三の宮にも対面なさいました)。

*いと幼げにのみ見えたまへば(宮は桐壺妃と比べても本当にただただ幼げにお見えなさるので)、心安くて(上は気が楽になって)、おとなおとなしく親めきたるさまに(余裕を持った親のような落ち着きで)、*昔の御筋をも尋ねきこえたまふ(祖先の血筋で互いに従姉妹同士にあたることまでも確かめ申しなさいます)。　*「いと幼げにのみ」は注に＜明石女御と比較した目で見る。＞とある。従って補語する。　*「昔の御筋」は注に＜祖先の血縁関係を話題にする。同祖父の先帝から出た従姉妹同士であること言い、親密感を抱かせる。＞とある。一章一段に「その中に藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましける」と三の宮の母親の説明があった。「先帝の源氏」は＜先帝の皇女で臣籍降下していた人＞なので、紫の上の実父である式部卿宮とは別腹妾腹の妹に当たる人だから、二人の親は兄妹で、二人は従姉妹同士。

中納言の乳母といふ召し出でて(上は宮の中納言の乳母という側近女房を近くに呼び寄せなさって)、

「*同じかざしを尋ねきこゆれば(同じ枝幹をたどり申せば)、かたじけなけれど(畏れ多いことながら)、分かぬさまに*聞こえさすれど(私は宮様と近い血縁ということですのに)、ついでなくてはべりつるを(今まではお近付き頂く機会が御座いませんでしたが)、今よりは疎からず(あなたも之からは心置きなく)、あなたなどにも*ものしたまひて(あちらの対の私どもの部屋にもお出向きなさって)、おこたらむことは(行き届かない点があれば)、おどろかしなどもものしたまはむなむ(ご注意頂ければ)、うれしかるべき(幸いです)」　*「同じかざし」は注に＜以下「うれしかるべき」まで、紫の上の詞。「わが宿と頼む吉野に君し入らば同じかざしをさしこそはせめ」（後撰集恋四、八〇九、伊勢）。＞とある。「かざし」は髪や冠に挿す花枝で、引歌で言う「かざし」は吉野が桜の名所なので＜桜＞を意味する、らしい。もし、上がこの「同じかざし」を引歌の筋を丸々下敷きにして言ったのなら、「わが宿と頼む吉野に君し入らば同じかざしをさしこそはせめ」は＜私が住まいと頼む六条院に宮も住むのなら同じ盛りを挿すことになるんですね＞となって、同じ釜の飯ならぬ、同じ男を咥え込む仲という相当に色濃い言い回しに聞こえて、だから「いと幼げにのみ見えたま」ふ宮には通じないかも知れないので、「中納言の乳母といふ召し出で」たのかとも読めそうだ。「尋ぬ」も＜訳を説明する＞と取れば整合性も取れる。が、当然に別の解釈は出来る。「同じかざし」は＜同じ枝花＞であり元の幹は同じ、とは即ち前言の「昔の御筋」を言い換えたもの、と取れば、「尋ぬ」も同じ＜元をたどる＞という意味だ。で、「昔の御筋」を「同じかざし」と言い換えたのは、重複を避けるということもあるだろうが、それは地文の指示代名詞で女房に説明語りさせれば事足りるので、此処にわざわざ上の言上として語るのは、上が宮に吉野行幸に関する王家の物語を紐解いた、と解すれば、その話の中身が混み入るので、中納言の乳母を呼び寄せて宮に解説させた、とも考えられる。Wikipedia を雑観したところ、近くは宇多上皇の吉野行幸もあったかも知れないが、何と言っても、兄帝である天智天皇の娘を娶った大海人皇子が吉野へ隠棲し、後に決起して天智天皇宗家旧勢力を破って王位を襲って天武天皇に位し、その皇后が天智天皇の娘であり、後の持統天皇である、という律令制形成期の根源的な王家物語に、弟院に降嫁した朱雀院三の宮を準えた、とは強ち穿ち過ぎでもないだろう。「かたじけなし」は祖先への敬いも含むかも知れない。いや勿論、御方の運営は女房体制なので、側近女房に良く事情を飲み込ませて置く、という一般的な意味で「中納言の乳母といふ召し出でて」と読んでも全く破綻しない。だとすれば、作者にしてみれば、当時の流行や気風などを背景に、紫の上の今風な感性を表現するために、「昔の御筋」の意味のまま「おなじかざし」の六文字を使っただけなのかも知れない。今となっては、超難文だ。　*「聞こえさす」は＜言う、手紙

を出す＞の謙譲語と辞書にあるが、上の話し相手は中納言の乳母という女房であり、上が謙譲を示すべき相手では無い。この「聞こゆ」は＜思われる＞という自分の見解で、「さす」も丁寧語なのだろう。また、その見解も自分についてのもので、宮に付いての事なら＜奉り聞こゆ＞とかになるのかも知れない。とにかく私には、実に分かり難い語用だ。　*「ものしたまひて」は注に＜東の対の方にいらっしゃって、の意。中納言の乳母に対する勧誘の詞。＞とある。女房に対して上は謙譲はしないが、話し相手に対しての尊敬語は使う。

などのたまへば(などを仰ると)、

「頼もしき御蔭どもに(頼みとする御両親に)、さまざまに後れきこえたまひて(御逝去と御出家のそれぞれで取り残され申しなって)、心細げにおはしますめるを(宮が心細げにしていらっしゃるようなところを)、かかる御ゆるしのはべめれば(こうした温かい御言葉を頂けますと)、ますことなくなむ思うたまへられける(この上なく有難く存じられます)。

*背きたまひにし上の御心向けも(出家なさった朱雀院の御意向も)、ただかくなむ*御心隔てきこえたまはず(どうかそのように貴方様が宮と距離を取り申しなさらずに)、まだいはけなき御ありさまをも(まだ物慣れない宮の御未熟さを)、はぐくみたてまつらせたまふべくぞはべめりし(ご教育申して頂きたいという事でございました)。*うちうちにも(内々のお手紙にも)、さなむ頼みきこえさせたまひし(院の上は貴方様にそのようにお願い申しあげていらっしゃいました)」
*「背きたまひにし」は注に＜朱雀院の出家をさいう。なお、中納言の乳母の言葉遣は、院に対して最高敬語ではなく、普通の敬語表現である。＞とある。朱雀院への「普通の敬語表現」は身内を謙譲する言い方になり、相対的に紫の上に対する敬語遣いになる、のだろう。　*この「みこころ」は＜紫の上の御気持＞。　*「うちうちにも」は＜内密に＞と古語辞典にある。が、この公然とした場で＜内密に＞は成立しない。是は六章九段にあった「紫の上にも、御消息ことにあり」のこと、かと思う。そう解せば、下の上の言葉にも繋がる。が、そうすると、中納言の乳母は紫の上宛ての朱雀院の信書を読んでいた、ようなことになってしまって、それはそれで如何なのかとも思うが、宮の筆頭女房であれば母代わりであり、宮の六条院入りに付いては朱雀院からさまざまな指示も受けていただろうし、相談も持ち掛けられていたことは確実なので、上への手紙も予め知らされていた、ということは有り得るし、その事情を上も承知していたからこそ「中納言の乳母といふ召し出でて」いた、と読んで置く。

など聞こゆ(などを中納言の乳母はお応え申します)。

「いとかたじけなかりし御消息の後は(まことに畏れ多い院の帝からのお手紙を頂戴してからは)、いかでとのみ思ひはべれど(是非お力になりたいと存じておりますが)、何ごとにつけても(如何せん)、*数ならぬ身なむ口惜しかりける(取るに足りない身の程が残念です)」　*「数ならぬ身なむ」は＜卑しい身分なので＞とも取れる言い方だ。この場合、今なら普通は＜力及ばず＞や＜行き届かず＞という言い方が謙遜の辞かと思われ、見方によっては殿や宮に皮肉を込めたトゲのある言い方かと懸念されるが、下に「安らかにおとなびたるけはひ」と上を形容してあるので、是が当時の普通の謙遜の辞なのだろうか。

と(と紫の上は)、安らかにおとなびたるけはひにて(穏やかに落ち着いた態度で)、宮にも(宮に対しても)、御心につきたまふべく(御興味が御有りそうな)、絵などのこと(絵の話や)、雛の捨てがたきさま(人形遊びの楽しさなどを)、若やかに聞こえたまへば(友達のようにお話し申しなさったので)、「*げに(殿が仰せのように)、いと若く心よげなる人かな(本当に快活で親切な

人だこと)」と、*幼き御心地にはうちとけたまへり(幼い宮のお気持ちには親しみをお感じになったのです)。　＊「げに」は源氏の前の言葉に納得する気持ち。と注にある。　*「幼き御心地には」の「には」という限定条件の断りには、紫の上の解けない苦悩が滲む。

［第五段　世間の噂、静まる］

さて後は(その後は)、常に御文通ひなどして(いつも御文通などをして)、をかしき*遊びわざなどにつけても(女房や童女相手の遊戯の勝ち負けなどの話題も)、疎からず聞こえ交はしたまふ(親しく知らせ合いなさいます)。　*「あそびわざ」は＜遊戯＞で、具体的には双六や碁や貝合わせなどかと思うが、「をかしき」を＜楽しい＞と取ると、遊戯は元々勝ち負けを競うので、面白い勝負があった、という話題なのだろう。

世の中の人も(世間も)、あいなう(どうしても)、かばかりになりぬるあたりのことは(このように混み入った家庭事情となった有名人のことは)、言ひあつかふものなれば(格好の話題にするものなので)、初めつ方は(初めの内は)、

「対の上、いかに思すらむ(対の上は如何お思いになるのだろう)。御おぼえ(六条殿のご寵愛は)、いとこの年ごろのやうにはおはせじ(とても今までのようには厚くいらっしゃらないだろう)。すこしは劣りなむ(少しは薄れるに違いない)」

など言ひけるを(などと言っていたのだが)、今すこし深き御心ざし(今まで以上の深い御愛情が)、かくてしも勝るさまなるを(姫宮を迎えた後でも増したようなのを)、それにつけても(それはそれで)、また安からず言ふ人びとあるに(逆に宮方に不満が出るように言う人々もいたが)、かく憎げなくさへ聞こえ交はしたまへば(このように上と宮が仲が良さそうに交際なされば)、こと直りて目安くなむありける(噂も収まり穏やかになっていました)。